



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

できたことを喜ぶ 喜び上手は人を育てる

先日、あるテレビ番組で、世界的に有名な一流の指導者が、日本の子どもたちに一週間の特別指導をしているのを見た。そのときはゴルフのレッスンだった。その一流の指導者は、ルディ・デュランさん(67)。あのタイガー・ウッズの育ての親とのこと。公立中学のゴルフ部(公立でゴルフ部があるのにはびっくりしたが…)の子どもたちに対し、技術指導なしにゴルフの上達をさせていた。ポイントはごく簡単なことであり、できたことを喜び合い、よいことを心にとどめ、それをことばにすることだそう。しかしながら、実際にできるのかというと、なかなか難しい。

いわゆる「リフレクション/ふりかえり」の大切さは、私たち教師もことあるごとに話題にしている。問題は、ふりかえる内容と改善、定着のための手続きだ。多くの場合、悪かったことを見つめるように促し、そして改善するための取り組み目標を整理せよというものである。取り組むのは本人、よくない、ダメだと指摘するのはわれわれ大人という関係なのだが、このルディ・デュランは違う。よかったことだけを思い出せ、そして忘れるな。先を楽しみに、自信を持って…というようなことばかけをするのである。

子どもたちは、練習手帳のようなものを持ち、自身のプレイを振り返っては書きとめていた。ある子は、これまで、ずっと□□が×だった。だから今度は○○しよう…と綴っていた。コーチや親からもあれこれと助言を受けていた。○○したらいい。○○してなかったから××となるんだ…と半ば咎めるような接し方だった。だから、いざ本番となると体がこわばり、思うような動きがとれず、自信はますます失われていく、そんなよくない循環だった。

教育実践者として全国的にも名の知られている元校長、吉永幸司さんが、ことばかけについてちょっとしたエッセイを綴っていた。できないことばかりを指摘され、がんばれと言われ続けることと、できていることを認め、ここまでできたと賞賛し続けていくことと、どちらが子どもを育てるだろうかという内容である。

3日やそこらくらいなら差はできないだろうけれど、これが1年、2年と積み重なり、しまいに、ウチの子はいつも××だと「できなさのレッテル」を貼ってしまうのは余りにも罪深い。

風薫る5月です。5月の風のように、さわやかな心持ちでよいことばかけができ、喜び合えるお互いでありたいものです。

校長 大林 道範